教養の風

神奈川大学
教養科目教育部会

〒221-8686
横浜市神奈川区六角橋3-27-1
電　話 045-481-5661(代)
ＦＡＸ 045-481-2793
Mail; kyouyou-staff@kanagawa-u.ac.jp

第 16 号　2023. 7.　編集･発行：教養科目教育部会

◆ 第 44 回大学教育学会大会参加報告 ……白石万紀子

◆ 増加が顕著な通信制大学の若年層
——第 29 回大学教育研究フォーラムから—— ……山口　拓美

◆ 魅力ある「体験型研修」に向けてー地域と大学連携の試みー ……齊藤　ゆか

◆ 2022 年度神奈川大学教養科目教育部会講演会報告 ……知花　愛実

第 44 回大学教育学会大会参加報告

経営学部　白石　万紀子

「教養の風」読者の皆様には周知のことと思いますが、大学教育学会大会は大学教育に係る様々な情報、先進的な取り組み、学術研究に根ざした実践成果の発表の場で、近年では教員に加えて参加者の10％は職員であり、それぞれの大学の教育のみならず、運営にも大きな貢献をしていると思われる学会です。今回は2022年6月4日、5日に岡山理科大学で行われた大会に参加する貴重な機会をいただきましたので、そのご報告をさせていただきます。

今回の大会統一テーマは「大学教育のDX―テクノロジーがもたらす大学教育のイノベーション」でした。まず、一言おことわりがございます。多くの読者の皆様はおそらく2023年の6月以降にこの文章を目にされると思います。2022年11月に革新的な生成AI、Chat-GPT4　がリリースされて以来、現在進行中でその生成AI技術の人間社会への有効な利用法が世界規模で議論させておりますが、この学会はそのリリースの約半年前に開催されたということですので、様々な点ですでにこのテクノロジーに関する状況は激変中ということになる点、ご了承いただければと思います。

ともあれ、今回の学会ではDX（デジタルトランスフォーメーション）分野の最先端を走る関係者を招いて大学や大学教育をサポートする管理運営におけるDX化の現状や課題、未来への展望が活発に議論されました。まず基調講演では筑波大学准教授でメディアアーティストの落合陽一氏により、『「魔法の世紀」の大学教育ビジョン』というタイトルのもと、今後の大学教育の未来予想がされました。２１世紀の人間の反応は統一化から多様化へ、人間の知識から人と機械の融合へ、マスから個人へ、標準化からパラメータ化へ変容していくので、大学教育もその方向で進むであろう、今後は物理的な制約のないメタバース大学も開発されていくのではないかとの予測が提示されました。

シンポジウムでは京都大学情報環境機構IT企画室教授の梶田氏、デジタルハリウッド大学准教授の茂出木氏、早稲田大学人事部業務構造改革担当副部長の神馬氏が登壇しそれぞれの立場からの提案がなされました。

梶田氏は組織における人的資源を開示するという意味でのデジタルcredential (証明書)が世界的には標準になっており、日本でも企業中心に装備が進んでいるが、大学もこうした装備が特にデジタルバッジという形で外部から求められるのではないかと提案されまし

た。神奈川大学でも学生が様々なプログラムやコースの修了証書をデジタルバッジの形で持ち運び、就職や転職の際に利用できれば良いと思います。この動きは本学でも現在進行形ですので、ぜひ学生のための良いシステムができることを願っております。また何のためのDXかという観点では、大学の地理的、時間的、予算的、事務業務的な壁を無くすための「Boundaryless University」を提案され、データ駆動型大学経営を主張されました。

茂出木氏は基調講演で落合氏が言及したメタバース大学を部分的ながら現在デジタルハリウッド大学で実施されており、その内容をスクリーンで紹介されました。メタバースでアバターを利用した講義や学生の活動参加によるメリットは大学の物理的制約を排除できるという点であり、場所の制限を飛び越え、実世界で体験できないこともある程度体験でき、学生や教員の身体的な制限（病気、精神的苦痛等）を排除できるというメリットを挙げられました。現在ご病気のため実世界での行動に制限のある学長をどのようにデジタル化していくかに注力しているとのことが実例を挙げてスクリーンに映し出されたのが印象に残っています。

神馬氏は、RPA（Robotic Process Automation）の導入について紹介されました。早稲田大学ではコロナ禍での突然のオンライン授業開始時にチャットボットを導入して教員や学生からの問い合わせの一次対応を行い、かなりの数の問題が解決に至ったとのことです。チャットボットで解決できないものだけに人員を当てることができたとのことでした。

ラウンドテーブルでは、京都大学高等教育開発推進センターのグループによる「汎用的能力の育成と評価の可能性：ミネルヴァ・モデルを手がかりに」の発表を聞きました。ご存知の方も多いと思いますが、ミネルヴァ大学は1学年150人が7カ国の寮に移り住みながら学生同士の助け合いや異文化没入体験、オンラインでの授業を通して学ぶ特徴を持つ大学です。1年次では「学び方を学ぶ」をテーマに批判的思考力（主張の検証、根拠・データ・判断・問題の分析）、創造的思考力（発見の促進、解法の設計、創造）、コミュニケーション能力（言語、非言語表現）、関係構築力（交渉の技法、協業の精神、倫理の尊重）の4つの汎用能力を身につけることが目標とされます。この4つの中核となる能力はさらに細かくHabits of mind & foundational Concepts(HCs)という80のコンセプトに分析され、これが4年次まで全ての授業において評価の基準に加えられます。2年次では「方向を探る」をテーマとして専門課程の基礎を学び、3年次では「学びとキャリアを探求・合成する」をテーマに専門課程の応用やより自律的プロジェクト学習に重きが置かれています。発表では1年次に「分野固有性に依らない汎用性」としてのHCsの導入により汎用的能力を育成し、2年次以降も専門教育課程で繰り返しこの能力を活用しながら、このHCsが自動的に適用できる状態（「遠い移転」）を目指しているが、限界としてHCs活用の意図が十分に理解されない場合、浅い戦略的アプローチに転化する危険があること、分野固有性の高いHCs活用の難しさ、が指摘されました。また、粒度の細かいHCsを4年間かけてルーブリックに基づき徹底的に評価することについては、目指すべきパフォーマンスが明確になり、HCsごとにフィードバックが継続的になされるので注意の焦点化を行いやすいが、学生のパフォーマンスがHCsの枠組みに拘束され、HCs得点が評価の対象になりがちでプロダクト全体が評価の対象になりにくいという限界が指摘されました。

80あるHCsには、「効果的リーダーシップの要素を適用する」というものから、「自説への反論に対しては感情的、論理的、個人的その他の要因も考慮してその評価を行う」、「他者の多様なスキル、能力、傾向、態度、信念を認めてこれを発揮してもらう」「不公正な活動や現状を認識したらそれを無くすように努める」など大変細かく具体的である点に驚くと同時に、世界規模で自らの利益だけでなく公益を追求する人間像を大学の理念としていることが強く感じられる目標群でした。

本大会では「大学教育のDX―テクノロジーがもたらす大学教育のイノベーション」を中心テーマに多くの示唆に富む発表を聞くことができました。DXは大学教育をめぐる地理的、時間的、予算的、身体的、事務業務的な制限を無くすための強力なサポートであるということが多くの発表に共通する主張でした。現在議論が進むChat-GPTについても本稿執筆中に本学から使用に関する留意事項が提示されましたが、今後も生成AIを含む様々なテクノロジーを学生の成長のためにどのように活用していくことができるかを、学生・教職員共に常に議論し、大学として今後も急速に変化する現代社会で活躍できる人材を輩出し続ける努力をしなければならないと思います。

増加が顕著な通信制大学の若年層
――第 29 回大学教育研究フォーラムから――

経済学部　山口　拓美

「本学は通信制大学ではありません。授業は対面で実施するのが当然です。」2021 年のことだったと思うが、ある会議でこのような発言を耳にした。まったくもっともな意見で、私も諸手を挙げて賛成した。授業のほとんどが遠隔で実施されるのなら、本学のような通学制の大学と通信制大学との境界はだいぶ曖昧なものになってしまう。どちらでもさほど変わらないのなら、通学制よりも学費の安い通信制で学んだ方がマシだと考える受験生が出てきても不思議ではない。そして実際にも、そのような受験生がかなりいたらしいことが分かった。2023 年 3 月に開催された第 29 回大学教育研究フォーラムで、私はこの事実を知らされたのである。以下では、同フォーラムの参加者企画セッション「通信制大学の若年層の増加から考える通信制と通学制の境界」の報告内容について簡単に紹介しておきたい。

同報告によれば、通信制大学は主に社会人を対象とする生涯教育の場であったが、「2010 年代の半ばから入学者に占める若年層の増加が顕著となり、コロナ禍でその傾向が一気に加速している」（報告集 138 頁）という。ここで若年層というのは 18 歳～ 22 歳の若者のことで、本学のような通学制の大学に在籍する学生の年齢層に対応する。この年齢層が、近年、通学制ではなく通信制大学において顕著に増加している、というのである。では、なぜこのような現象がおきているのであろうか。

もちろん、その要因の一つは、通学制であっても授業がオンラインで実施されるのなら通信制と変わらないという事情である。この事情が、通信制の安い授業料と結びつけば、通常の大学を受験しないで通信制大学に出願する高校生が出て来るのは自然である。

しかし、これに加えて同報告は次のような諸要因を挙げている。まず、スポーツや芸能活動と学業を両立させたいという若年層にとっては、通信制の方が通学制よりも良い条件を提供してくれる。また、資格取得だけが目的なら通信制であっても何ら問題ない。さらに、若年層に魅力的なプログラムを用意している通信制大学もある。これに加えて、近年、通信制高校の生徒数が増加しており、この生徒たちの一定数が通信制大学に進学するようになっている、という。安い授業料にこうした諸要因が加わり、通信制大学の人気が高まっているのである。

報告を聞いて私が気になったのは、この最後の要因である。というのは、私も最近、通信制高校に在籍する生徒数が増えているという事実を友人から聞いて驚いたことがあったからである。少子化により高校生の数は減少しているが、通信制高校の生徒数は増えているのである。

通学制の大学の授業のオンライン化は、本学を別とすれば、コロナ禍による一時的な現象であるといえる。授業実施形態が対面に戻り、課外活動も正常化すれば、通学制と通信制の相違は再び明確になる。

そうなれば、通学制大学でもオンライン授業だからという理由で通信制を選択する若年層はいなくなるはずである。これに対して、通信制高校の在籍者数の増加は、授業のオンライン化とは別の要因を背景としている。この要因が何かということについては同報告では触れられていなかったが、いずれにしてもこれは、コロナ禍前から見られるようになった顕著な現象である。もし通信制高校の生徒数の増加傾向が続き、その一定数が通信制大学に進学するとすれば、通信制大学に対するニーズは今後も減少せず、むしろ増加すると考えられる。

「本学は通信制大学ではありません。授業は対面で実施するのが当然です。」私はこの意見に現在も諸手を挙げて賛成である。しかし、幸か不幸か本学では多くの授業を遠隔授業の形態で実施し続けることとなった。私自身も現在、遠隔授業を行っている。おそらく今後、本学には遠隔授業についてのノウハウが蓄積され、授業の質が向上していくであろうと思われる。オンディマンド教材とレポート課題の提出だけで履修学生に高い満足度を与えられるような優れた授業も出てくるに違いない。そしてもしそうであるとすれば、本学の遠隔授業群を体系化し、併せて通信教育課程を新設するというのも全く的外れな考えとも思えなくなる。少なくとも、第 29 回大学教育研究フォーラムに参加した私はそのように思ったのであった。

魅力ある「体験型研修」に向けて―地域と大学連携の試み―

人間科学部　齊藤　ゆか

「体験型研修」は、2023 年度から新規授業がスタート。既に小田原市や鎌倉市などの現地を訪問した。「食育わくわく体験」では、5 月初回には下中たまねぎ収獲を予定。ただ、生憎の大雨に見舞われたが、軒下で次の野菜を育てる準備や袋詰めなどの多様な体験ができた。地元猟師さんから、畑の獣害被害の学習の機会を得た後、猪やシカ肉を頂いた。一方、学内キャンパスでは、囲碁体験や美術鑑賞を実施。正に生きた学びを展開している。

この「体験型研修」こそ、本学伝統の実学教育に通じている。学生一人ひとりの好奇心を高め、人間的成長と実践的能力を促していくことを目指す。

本学に相応しい授業「体験型研修」のあり方を再検討するため、2021 年度にワーキンググループで再検討を行った上で、2022 年度から共通教養教育センターの新規部会となった。同メンバーは、スポーツを専門とする教員をはじめ、地理学、民俗学、生涯教育学、生物学と学際領域で構成された。フィールド経験が豊富で、労を厭わない中堅教員が集結した。

本学独自の魅力ある「体験型研修」にするために対面協議を重ね、アイディアを創発してきた。

そこで、本稿にて「体験型研修」の意味や種類、特徴ある点を紹介したい。

まず、体験型研修の意味や意義についてである。本学のいう体験型研修とは、「教育活動の一環として、人や自然・文化・社会等と関わる活動を直接行うことで、経験できる実践的な学び」である。「現地に足を運び、実物に触れること」「多様な人々と交流・協力し合い行動すること」「地域社会の課題解決に貢献すること」など SDGs にも貢献できる。こうした経験学習を通じて、実践的能力と学部や世代を越えたコミュニケーション力を高めていくことを期待している。

次に、体験型研修の豊富なプログラム創りと地域連携についてである。体験活動のメニューは豊富にある。本学は、図1のように「文化・スポーツ体験」、「自然体験」、「地域貢献・社会体験」など、多様な学びを展開する。スポーツ系の授業（マリンスポーツ、ゴルフ、スノースポーツ）や「囲碁」「自然体験」は既に行われてきたが、「法的交渉入門プログラム」「みどりの鎌倉」「食育わくわく体験」「ひらめき鑑賞学」「石造物で知る歴史と文化」は新規授業となる。このうち

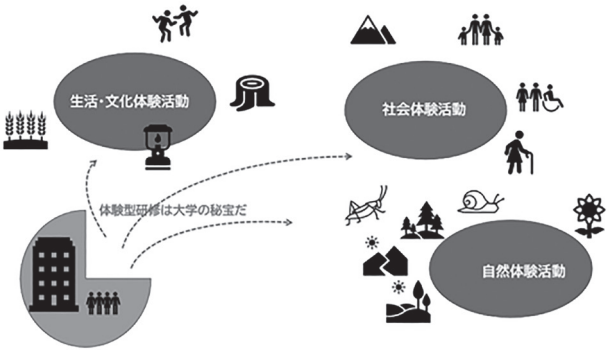

図 1　体験型研修のイメージ

学外実習は、地域との連携が不可欠である。自治体をはじめ、NPO 法人、ボランティア団体、地縁組織等との協働は、大学と地域との信頼関係で成り立つ。

さらに、体験型研修の授業方法の工夫とリスク管理についてである。授業の方法は、少人数で双方向性を伴うアクティヴ・ラーニングを特色とする。教室外で行う「体験型研修」と教室内で行う「講義型教育」の教室スタイルの相違を示したのは表 1 の通りである。とりわけ、従来から実施されてきたスポーツ系の授業では、理論と実技のバランスの標準化を行い、誰にも履修できる授業にした。一方、学外実習を伴うリスク管理を行うため、教員と事務局との連携体制の確認を行った。

最後に、体験型研修の運営（広報とガイダンス）についてである。本学のユニークな授業を積極的に内外へ発信するため、分かりやすい冊子（授業プログラム）を独自に作成した。新入生はもとより、高校生やその保護者にとっても魅力ある情報提供を行う試みである。また新年度には、同冊子を活用したガイダンスを行い、意欲ある学生への理解を促した。ガイダンスは、盛況のうちに終わった。一方、高大連携につなげた授業を一部試行するものの、事務局との連携やリスク管理の視点から更なる検討が必要である。

以上が、本学の「体験型研修」の特色といえるだろう。2023 年度現在、「体験型研修」（14 種類）の授業開講数は全 21 コマ（前期 9 コマ・後期 6 コマ・集中 6 コマ）となった。担当教員数が 26 名（うち非常勤講師 13 名）、延べ授業履修者数が 494 名程度と予測される。1 年間の履修見込みとなる学生総数（学

表１　体験型研修と講義型教育の違い

教室外　＜体験型研修＞	教室内　＜講義型教育＞
条件が多様で、未知の学び	条件が定まり、一貫した学び
双方向の学び（コミュニケーション）	一方向の学び、効率的に知識伝達
実体験のある実践的学び	実体験がない（映像等の疑似体験）
社会の接点やつながりができる	社会との接点はない
学部・学科をこえた学生交流	学生間の交流は限定される
多世代・多文化とのかかわり	図書や資料等を読み取る
偶発的な学びや交流	計画的な学び、受動的な学び
地域や社会へ貢献ができる	間接的な学びで、行動はしない
興味・関心が広がり、新しい世界へ	専門領域を極める
新しい文化の創造や発展のある学び	自身で創造的に組み立てる

部：約 17,000 人）は約 3%に該当する。

今後にむけた、いくつかの課題が残されている。それは、第一に、専門領域に偏りがない授業構成にすることである。そのためには、全学部の協力体制が欠かせない。第二に、特色ある授業の FD 評価を行っていくこと。授業の記録と評価が不可欠である。第三に、「体験型研修」を複数開講できるように、改革期に改正していくことである。なぜなら、「体験型研修」は 1 科目しか選択できないからである。

これからも教員と事務局との英知を結集し、総合大学に相応しい、拓かれた授業改善を積み重ねていきたい。是非、先生方のご協力をお願いしたい。

2022 年度神奈川大学教養科目教育部会講演会　報告

経営学部　知花　愛実

2022 年度の神奈川大学教養科目教育部会講演会が 2023 年 2 月 15 日にオンラインで開催されました。

教養部会委員でもある本学理学部の安積良利教授をはじめ、日野晶也名誉教授、吉田修久講師の三名の方にご講演いただきました。本講演会では、「湘南ひらつかキャンパスの立地条件を生かした自然体験型教育の試み」と題し、安積先生らが長年携わり、ご開講いただいている体験型の共通教養科目の取り組みについてお話をいただきました。

はじめに、「湘南ひらつかキャンパスと地域の活動の紹介」として安積先生より湘南ひらつかキャンパスに見られるさまざまな自然の風景をご紹介いただきました。冬に咲くツバキや水仙、雪が降ると地面にアナグマのかわいい足跡が見つかることもあるそうです。

つくしが芽生え、キャンパスのソメイヨシノも満開になり意気揚々とした新入生の姿とともに新しい年度を迎え、心持ちを新たにした春です。裏山にどんどん生えてくるタケノコは掘っても食べても追いつかないほどだそうです。

アジサイが咲き、夏が近づく頃にはキャンパスの中心部に小さな池が整備されたビオトープに、活気に満ちた生きものたちの生活空間を見ることができます。

池にはメダカ、草木にはトンボ、夜には「ホタル川」のホタルが光を発しながら飛び回ります。安積先生のお気に入りのケヤキが紅葉し始めるとあっという間に秋の深まりを感じる季節です。地域の方々に「神大が飼っている」と言われているイノシシ出没のうわさもちらほら耳にします。陸上競技場の向こうに見える富士山に初冠雪したようです。自然と共に感じる一年はあっという間です。

湘南ひらつかキャンパス内にある多くの花や草木、生きもののすみかとなる木々や森、川など、近隣の豊かな自然が四季折々醸し出す多様な表情の記録を、写真とともにご紹介いただきました。また、平塚市土屋地区の団体である「里山をよみがえらせる会」の皆さまとともに、田植えや稲刈り、餅つき、味噌作りや筍ごはん作りなど、平塚の自然と里山を活用した自然体験学習を行ってきたことを概説いただきました。

次に、日野先生から「自然の体験学習の立ち上げと変遷」についてお話いただきました。2008 年に「山

の体験学習」として始まったこの科目は当時、座学での学習スタイルが主だった大学の講義の枠組みを越え、学生を外に出し、体験から学ぶ機会として考案されました。山岳部の助けを借りつつ、多い時は100名を超える受講者を大山登山へ誘導したこともあったそうです。その後は「自然の体験学習」や「体験型研修」として、キャンパス内での自然観察にやり方を変えつつも、理論や学問的なものだけでなく観察の仕方を学生に教授し、キャンパス内にあるいろいろなものを学生に見つけてもらい、それらを写真やレポートにまとめたそうです。

また、「教養科目の中の自然の体験学習」として吉田先生からは、教養科目であってもただの知識ではなく、実際に触れて実感することの大切さをお示しいただきました。身近なところにあるものを題材として見せてみること、花、木、虫、匂い、四季の変化など自然から何かを見つけること、また学生が自身の生活の中で何かに気づき、自由に考えるように働きかけることなど、自然と私たちの生活に関連してやってみる体験学習は、私たち自らの生活をつくり、自然環境問題への意識の高まりや行動を起こすきっかけとなることをお話いただきました。

最後に、安積先生から自然の体験学習への想いを共有していただきました。自然の体験学習の内容として、湘南ひらつかキャンパスの自然を継続して観察することや自然の存在や季節の変化を感じ楽しむことは、日々の幸福感を高め、私たち人間の心と生活を豊かにすることにつながるとの見解を述べられました。そして、地域の方々との交流を通し、自然を生活に取り入れ、生かしてきた術を学び、環境に負荷をかけず、学生の将来の生活の糧となるような体験学習の教養科目としての役割をお示しいただきました。今回ご講演いただいた先生方は、学生だけでなく、教員が一番楽しみ、ともに感動していくことを心がけているそうです。研究者として、また教育者として、このような姿勢と心構えを見習いたいと思いました。

私が神奈川大学に着任したのは2019年の春で、所属する経営学部はまだ湘南ひらつかキャンパスにありました。初めて同キャンパスを訪れた際も、近隣の自然の豊かさに驚かされました。人生の大半を常夏の島で過ごした私にとって、ひらつかキャンパスでの最初の一年は日々四季を感じる環境にただ感動するばかりでした。FYSで初年次の学生を連れてキャンパスツアーを実施し、キャンパスのおすすめスポット探しをしたこともありました。その平塚の自然を満喫する前に、翌年の2020年はコロナ禍で外出自粛となりました。さらに、みなとみらいキャンパスへ移転した2021年と続き、平塚からはすっかり足が遠のいてしまいました。他の先生方ほどではありませんが、時折、あの景色と環境が恋しくなることがあります。この感覚こそが自然のなせるわざでしょう。

どんな学問分野でも自然やフィールドから学ぶことはたくさんあります。見る、聞く、嗅ぐ、触れる、味わう、感じるなど、五感を十分に使って得た気づきや学びは、学生たちの中にもしっかりと根を張り、他の誰も奪えない大きな財産となるでしょう。2023年度からは横浜にキャンパスが集結する神奈川大学ですが、これからも「自然体験型教育」を続けていく意気込みたっぷりの安積先生でした。今後のますますのご発展を応援しています。

原稿募集

「教養の風」では、掲載する原稿を募集しています。当部会に関わることや教養教育・初年次教育に関わることなどについて投稿してください。また、ご意見・ご感想もお寄せください。
Mail；kyouyou-staff@kanagawa-u.ac.jp
Fax；045-481-2793

編集後記

「教養の風」第16号をお届けします。

近年、大学の教育方法は急速に変化しています。特にコロナ禍におけるオンライン授業や教育資源のデジタル化は、技術の進歩によりますます普及しています。このような変化は、地理的な制約や時間の制約を気にすることなく、学生に柔軟な学習環境を提供するものです。一方で、教養教育の特色でもある体験型学習は、現場見学や実地調査などを通じて学生たちが理論的な知識を実際の現場で活かす方法を学ぶための貴重な機会を提供しています。教養科目教育部会は、学生が豊かな学びの経験を得ることができるよう、さまざまな教育手法や取り組みを用意しています。このニュ ーズレターを通じて、私たちの取り組みの一端をお伝えできればと思います。
引き続き、皆様お願い申し上げます。